

阪神間6市1町の人口構造と流動パターン

——尼崎, 西宮, 芦屋, 伊丹, 宝塚, 川西, 猪名川——

倉田和四生

- (1) 阪神都市圏における6市1町の位置
- (2) 6市1町の人口構造
- (3) 人口動態
- (4) 産業別・職業別構成と型
- (5) 人口流動のパターン
- (6) 人口移動

〔1〕阪神都市圏における「阪神間諸都市」の位置

今日の人口の都市集中は単に中心都市への集中

ではなく、中心都市を核として機能的連関をますます強めていく、大都市圏への人口集中である。

このようなメトロポリタニゼーション (metropolitanization) の進行は2つの局面にきわだって現れる。1つは中心都市ことにその都心部の人口増加の停滞ないし人口減退傾向であり、他は周辺部における人口の急増傾向である。これらは両々相まってドーナツ化現象を生み出す。見方をかえると、これは郊外化 (suburbanization) である。

第1表は阪神都市圏における核心大都市 (大阪市と神戸市) と周辺都市の人口のウエイトの変化を示している。

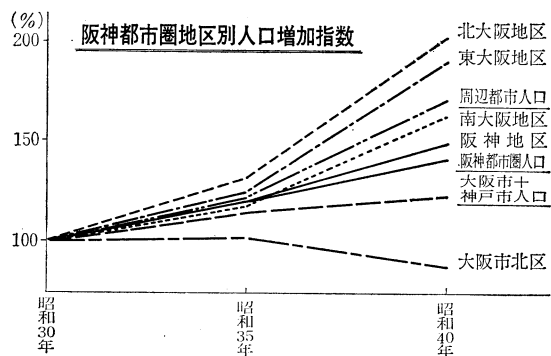
第1表 阪神都市圏人口の圏構造

	昭和30年 (ウエイト)		昭和35年 (ウエイト)		昭和40年 (ウエイト)		増加人口(率) 昭和30—35年		増加人口(率) 昭和35—40年	
	実数	率(%)	実数	率(%)	実数	率(%)	実数	率(%)	実数	率(%)
(A) 都市圏人口(人)	5,887,344 (100)	100.0	7,021,655 (120)	100.0	8,428,728 (143)	100.0	1,134,311	19.3	1,407,073	20.0
(B) 大都市人口(人)	3,533,660 (100)	60.0	4,125,454 (116)	58.7	4,372,888 (124)	51.9	591,794	16.7	247,434	6.0
(C) 周辺都市人口(人)	2,353,684 (100)	40.0	2,896,201 (123)	41.3	4,055,840 (172)	48.1	542,517	23.0	1,159,639	40.0

資料：大阪市政研究所，都市圏の発達と阪神都市圏の現状，1967年3月 54頁

都市圏全体をとれば昭和30年～35年よりも35年～

第1図



40年の増加率が大きく成っている。これは阪神都市圏全体への人口集中がますます激しく成っていく傾向を示している。しかしこれを核心都市 (大阪・神戸) と周辺都市とに分けてみると両者の増加率には大きな差がみられる。

核心都市の人口増加率は昭和30年～35年の16.7%から6.0%へと急激に低下している。これとは逆に周辺都市においては、昭和30年～35年、23.0%から昭和35年～40年、40%、実数において2倍以上の増加をみせている。その結果、核心都市と周辺都市の割合は昭和30年に60:40、35年には、58.7:41.3であったものが40年には51.9:48.1と

第2表 「阪神都市圏」諸都市の人口と人口変遷

		昭30年 人口 A 人	昭35年 人口 B 人	昭40年 人口 C 人	増加人口 30-35 D 人	増加人口 35-40 E 人	D/A 増加率% (順位)	E/B 増加率% (順位)
大 都 市	大 阪 市 神 戸 市	2,547,316	3,011,553	3,156,222	464,237	144,669	18.2 ^㉑	4.8 ^㉒
		986,344	1,113,901	1,216,666	127,557	102,765	12.9 ^㉓	9.2 ^㉔
阪 神 地 区	尼 崎 市	335,513	405,962	500,990	70,449	95,028	21.0 ^㉕	23.4 ^㉖
	西 宮 市	210,179	262,609	336,873	52,430	74,264	24.9 ^㉗	28.3 ^㉘
	明 石 市	120,200	129,774	159,299	9,574	29,525	8.0 ^㉙	22.8 ^㉚
	伊 丹 市	68,982	86,452	121,380	17,470	34,928	25.3 ^㉛	40.4 ^㉜
	宝 塚 市	55,084	66,490	91,486	11,406	24,996	20.7 ^㉝	37.6 ^㉞
	芦 屋 市	50,960	57,050	63,195	6,090	6,145	12.0 ^㉟	10.8 ^㊱
	川 西 市	35,158	41,911	61,282	6,753	19,371	19.2 ^㊲	46.3 ^㊳
	地 区	876,076	1,050,248	1,334,505	174,172	284,257	19.9 ^㊴	27.1 ^㊵
	100	120	150			—	—	
北 大 阪 地 区	豊 中 市	127,678	199,057	291,936	71,379	92,879	55.9 ^㊶	46.7 ^㊷
	吹 田 市	97,296	116,772	196,779	19,476	80,007	20.0 ^㊸	68.5 ^㊹
	高 槻 市	63,785	79,043	130,735	15,258	51,692	23.9 ^㊺	65.4 ^㊻
	茨 木 市	56,641	71,861	115,136	15,220	43,275	26.9 ^㊼	60.2 ^㊽
	池 田 市	50,073	59,688	82,478	9,615	22,790	19.2 ^㊾	38.2 ^㊿
	箕 面 市	29,259	34,249	43,851	4,990	9,602	17.1 [㋀]	28.0 [㋁]
	摂 津 市	19,329	24,385	43,479	5,056	19,094	26.2 [㋂]	78.3 [㋃]
	地 区	444,061	585,055	904,394	140,994	319,339	31.75 [㋄]	54.6 [㋅]
	100	132	202			—	—	
東 大 阪 地 区	布 施 市	176,052	212,749	271,704	36,697	58,955	20.8 [㋆]	27.7 [㋇]
	八 尾 市	105,696	122,833	170,248	17,137	47,415	16.2 [㋈]	38.6 [㋉]
	守 口 市	78,710	102,290	138,856	23,580	36,566	30.0 [㋊]	35.7 [㋋]
	枚 方 市	59,327	80,319	127,520	20,992	47,201	35.4 [㋌]	58.8 [㋍]
	河 内 市	44,539	55,133	91,853	10,594	36,720	23.8 [㋎]	66.6 [㋏]
	枚 岡 市	42,281	50,110	79,524	7,829	29,414	18.5 [㋐]	58.7 [㋑]
	寝 屋 川 市	36,488	50,188	113,576	13,700	63,388	37.5 [㋒]	126.3 [㋓]
	柏 原 市	33,362	35,646	44,972	2,284	9,326	6.8 [㋔]	26.2 [㋕]
	大 東 市	30,382	35,355	57,107	4,973	21,752	16.4 [㋖]	61.5 [㋗]
	門 真 市	20,858	34,228	95,209	13,370	60,981	64.1 [㋘]	178.2 [㋙]
地 区	627,695	778,851	1,190,569	151,156	411,718	24.1 [㋚]	52.9 [㋛]	
	100	124	190			—	—	
南 大 阪 地 区	堺 市	315,208	371,502	466,412	56,294	94,910	17.9 [㋜]	25.5 [㋝]
	松 原 市	38,458	47,037	71,406	8,579	24,369	22.3 [㋞]	51.8 [㋟]
	羽 曳 野 市	32,849	36,998	50,333	4,149	13,335	12.6 [㋠]	36.0 [㋡]
	藤 井 寺 市	19,337	26,510	38,221	7,173	11,711	37.1 [㋢]	44.2 [㋣]
	地 区	405,852	482,047	626,372	76,195	144,325	18.8 [㋤]	29.9 [㋥]
	100	119	163			—	—	

注1. 各年の人口は現市域における10月1日現在人口数である。

2. 各年とも総理府統計局による確定数人口である。

資料：大阪市政研究所，都市圏の発達と阪神都市圏の現状。1967年3月，56頁

ほぼ相伸ばするほどに成っている。これからみても阪神都市圏においては35年ごろからドーナツ化現象が顕著に成って来たと考えられる。

しかし周辺都市の人口増加は必ずしも同じペースで進行しているわけではない。急激に増加している地区もあれば，増加率の低い地区もある。第

2表は阪神都市圏を4つの地区に区分して地区毎の増加率を昭和30年～40年にわたって見たものである。

6市1町を含む「阪神地区」はわが国でも最も早く都市化一郊外化の進行した地区であるが、昭和30年～35年には増加率は19.9%と他に比べて低い。昭和35年～40年には、27.1%に達したが他の地区に比べると断然低い。この地区は明治末から大正期以来、都市化・郊外化がすすんでいるため、都市化は一応限界に近づきつつあるといえる。したがってこれからの地域開発は新しい技術の駆使によって山地や丘陵の開発に向けられざるを得ない。このような段階では都市化のテンポは平野部（北大阪地区や東大阪地区）よりもおそく成ることは避けられない。

阪神地区について都市化がすすんだのは「北大阪地区」であるが、千里丘陵の開発にともなって飛躍的に都市化がすすみつつある。昭和30年～35年、昭和35年～40年の間の地区別の人口増加率はこの地区が最高と成っている。

「北大阪地区」について最近急激な人口増加を示しているのは「東大阪地区」である。ことに昭和35年から40年にかけての増加率の増加の割合は最高である。40年以降もしばらくこの地区が最も高い増加率を示すことはほぼ確実であろう。

「南大阪地区」は近い将来において急激な人口増加が予想される地区である。昭和30年～35年の増加率は阪神地区よりも低かったが、昭和35年～40年の増加率は「阪神地区」よりも高く成っているところからみても、そのことがうかがわれる。このようにみえてくると、阪神都市圏の都市化は時計の針の進行方向のように右まわりにすすんでいるといえる。

これまで述べてきたところから明かなように阪神都市圏における「阪神間諸都市」の位置は阪神間の都市化のさきがけと成り、大阪・神戸の二大都市間にあって工業化、住宅地化・郊外化に大きな役割を果たしたといえる。しかしながら最近の急激な都市化・郊外化のなかで、北大阪、東大阪、南大阪の都市化がすすむにつれて、その役割は相対的にみて次第に低下しつつあるといえる。しかしながら開発技術の進歩にともなって丘陵開発がすすみ、これまでの都市化とは異質の都市化がす

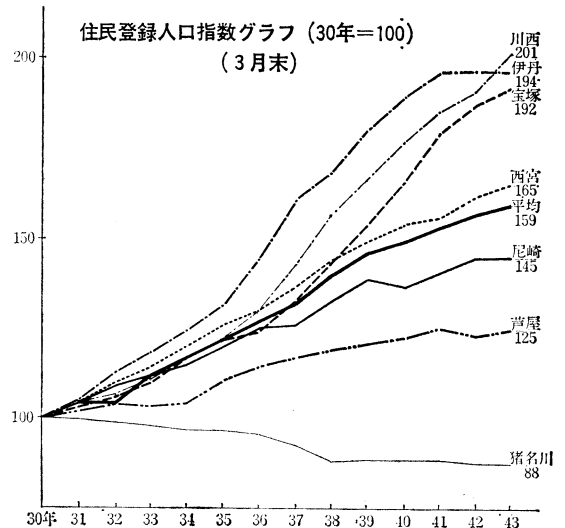
むむことが予想される

〔2〕六市一町の人口構造

(1) 総人口の推移

6市1町における総人口の推移を30年を100とする指数で表したものが第2図である。これによる総人口の推移には3つのパターンがみられる。Aグループは昭和35年ごろから急速に増加した伊丹、川西、宝塚の3市である。これらの都市は人口規模もちいさく最近になって急速な住宅地化の進行している地域である。このなかでも伊丹市の場合には40年以降増加率の伸びが鈍化しつつあるのに対して川西、宝塚の2市においては増加の勢いはますますつづけている。Bグループには西宮、尼崎がある。これらの2市は人口規模が最も大きく、増加率においてはAグループのような大きな伸びがみられない。しかし西宮市の場合には40年以降において、また増加率の急増のきざしがみられる。C型としては芦屋市がある。芦屋市は関西における典型的な高級住宅地で、かつてかなり急速に住宅地化のすすんだ時期があったが、最近の人口増加率は6市1町間で最も低く成っている。ことに40年以降むしろ減退の兆しをみせている。D型としては猪名川町がある。この町は総人口からみて他の市とは全く異ったパターンを示している。すなわち30年以降人口は減退の一途をた

第2図



どっている。ことに35年から38年までに急速に減少したが、それ以降は横バイの状態である。しかし猪名川町の場合にも今後の地域開発によって大きな変化が予想される。

(2) 性比

わが国全体の性化は96.5～6の線で昭和30年以降安定しているが、6大都市の性比は昭和30～40年の間は102.5から103.5へと変化している。

第3表 全国の性比

	全 国	6大都市
昭 和 30	96.6	102.5
35	96.5	104.9
40	96.6	103.5

資料：各年国勢調査

第4表 阪神間6市1町の性比

	尼崎	西宮	伊丹	宝塚	芦屋	川西	猪名川
昭和30	100	97.6	103.6	91.7	96.2	95.0	100.0
35	104.5	100.8	104.1	94.2	95.5	98.8	98.4
40	104.0	101.6	106.6	98.4	94.6	101.6	97.6

資料：各年国勢調査

次に6市1町の性比をみると、尼崎、西宮、伊丹、川西のように100をこえるものと宝塚、芦屋猪名川のように100を大きく割る市がある。尼崎伊丹は30年代から男の割合が多く、工業都市の性格を示しているものと考えられる。わけても伊丹市は県下最高の数字を示しているが、自衛隊の基地をもっていることがかなり影響していると推定される。西宮市と川西市は35年以降に成って男子の割合が増加して来た。次第に尼崎や伊丹のような第二次産業の比重が増大しつつあると思われる

第5表 全国の年少、生産、老令別人口比

年 令	年度	昭和40年	昭和35年	昭和30年	昭和25年	昭和22年	昭和15年	昭和10年	昭和5年	大正14年	大正9年
0～14才 (年少人口)		25.6	30.0	33.4	35.4	35.3	36.0	36.9	36.6	36.7	36.5
15～64才 (生産年令)		68.1	64.2	61.3	59.7	59.9	59.2	58.5	58.7	58.3	58.3
65才以上 (老令人口)		6.3	5.7	5.3	4.9	4.8	4.7	4.6	4.7	5.1	5.3
総 数		100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

資料：総理府統計局、『わが国の人口』，39頁

芦屋市の場合には次第に男子の割合が減少しつつある。第二次、第三次産業の割合からみても大きな変化がないところからみて老令人口の増加も一因ではないかと思はれる。

宝塚市の場合には昭和30年には91.7%と男の割合は低く保養サービス都市の性格が強かったが、40年には98.4%と大きく変りつつある。これは旅館・歌劇などのサービス業のウエイトが減少し、工業的要素のウエイトが大きく成ったものと考えられる。

これらの都市と違って、猪名川町の場合には人口の減退がみられたが、その際の流出人口は男性が多く、女性が残るところからきていると考えられる。

(3) 年令別人口構成

年令別人口構成はその都市における過去から現在にいたる間の出生・死亡・移動によって決定されるもので、過去の出生、死亡を左右し人口移動に影響する。また労働力の供給量をも規定するし年令の割合によって社会的、経済的な影響をおよぼすものとして人口分析上最も重要なものである

各都市の年令別人口構成は第2図に示した。各都市はそれぞれ特色をもった人口構成をもっているが、大きく「年少人口」(0才～14才)、「生産年令人口」(15才～64才)、「老令人口」(65才以上)に分けてみよう。

まず全体的傾向としては

- 1) 年少人口比の急激な減少
- 2) 生産年令人口の増加
- 3) 老令人口の漸増

があげられるが、この三つの傾向は6市1町の場合にも例外なくあてはまっている。しかし比率の絶対値および増減の割合については各市においてやや異っている。

第6表 広域都市の年令別構成

市 年度 年令	尼 崎 市			西 宮 市			伊 丹 市			宝 塚 市		
	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和30年	昭和35年	昭和40年
0～14	31.5	26.9	23.3	29.6	25.6	22.6	30.8	26.0	23.6	30.3	26.1	23.1
15～64	65.3	69.8	73.1	66.3	71.1	73.0	65.3	70.0	72.6	65.0	68.7	71.8
65才 以上	3.2	3.3	3.6	4.1	4.3	4.4	3.9	4.0	3.8	4.7	5.2	5.1
総 数	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

市 年度 年令	芦 屋 市			川 西 市			猪 名 川 町		
	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和30年	昭和35年	昭和40年
0～14	27.1	24.0	21.0	30.4	27.1	24.4	33.1	30.9	25.4
15～64	68.6	70.7	72.8	63.5	67.8	70.8	59.7	61.9	64.7
65才 以上	4.3	5.3	6.2	5.1	5.1	4.8	7.2	7.2	9.9
総 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

第7表 従属負担係数, 年少人口指数, 老年人口指数, 老令化指数

市 年度 指数	尼 崎 市	西 宮 市	芦 屋 市	伊 丹 市	宝 塚 市	川 西 市	猪 名 川
	従属負担係数	昭和30年 56.1	50.8	45.8	53.0	53.8	55.9
	昭和35年 43.2	42.0	41.4	42.8	43.4	47.4	61.5
	昭和40年 35.8	36.9	37.3	37.6	39.2	41.1	54.6
年少人口指数	昭和30年 48.2	44.6	39.5	47.1	46.6	47.9	55.4
	昭和35年 38.5	36.0	33.9	37.1	37.9	39.9	49.9
	昭和40年 31.9	30.9	28.8	32.5	32.1	34.4	39.3
老年人口指数	昭和30年 7.9	6.2	6.3	5.9	7.2	8.0	12.1
	昭和35年 4.7	6.0	7.5	5.7	7.5	7.5	11.6
	昭和40年 4.9	6.0	8.5	5.2	7.1	6.7	15.3
老令化指数	昭和30年 10.2	13.9	15.9	12.3	15.5	16.8	21.8
	昭和35年 12.3	16.8	22.1	15.4	19.9	18.8	23.3
	昭和40年 15.4	19.5	29.5	16.1	22.0	19.7	38.9

まず年少人口比についてみると、21%から25.4%で全国平均よりも低く都市型の特徴を示している。芦屋市の場合には21%と最低を示している。

生産年令人口比については猪名川をのぞけば70%台である。

老令人口比は尼崎、伊丹市が3%と低いのにたいして芦屋市(6.2%)と猪名川町(9.9%)異常に高く成っている。

このような人口の年令構造の違いは市の経済性や、行財な需要に密接な関係をもっている。次にここでは、1) 従属負担係数 $\left(\frac{\text{年少人口} + \text{老年人口}}{\text{生産年令人口}}\right)$

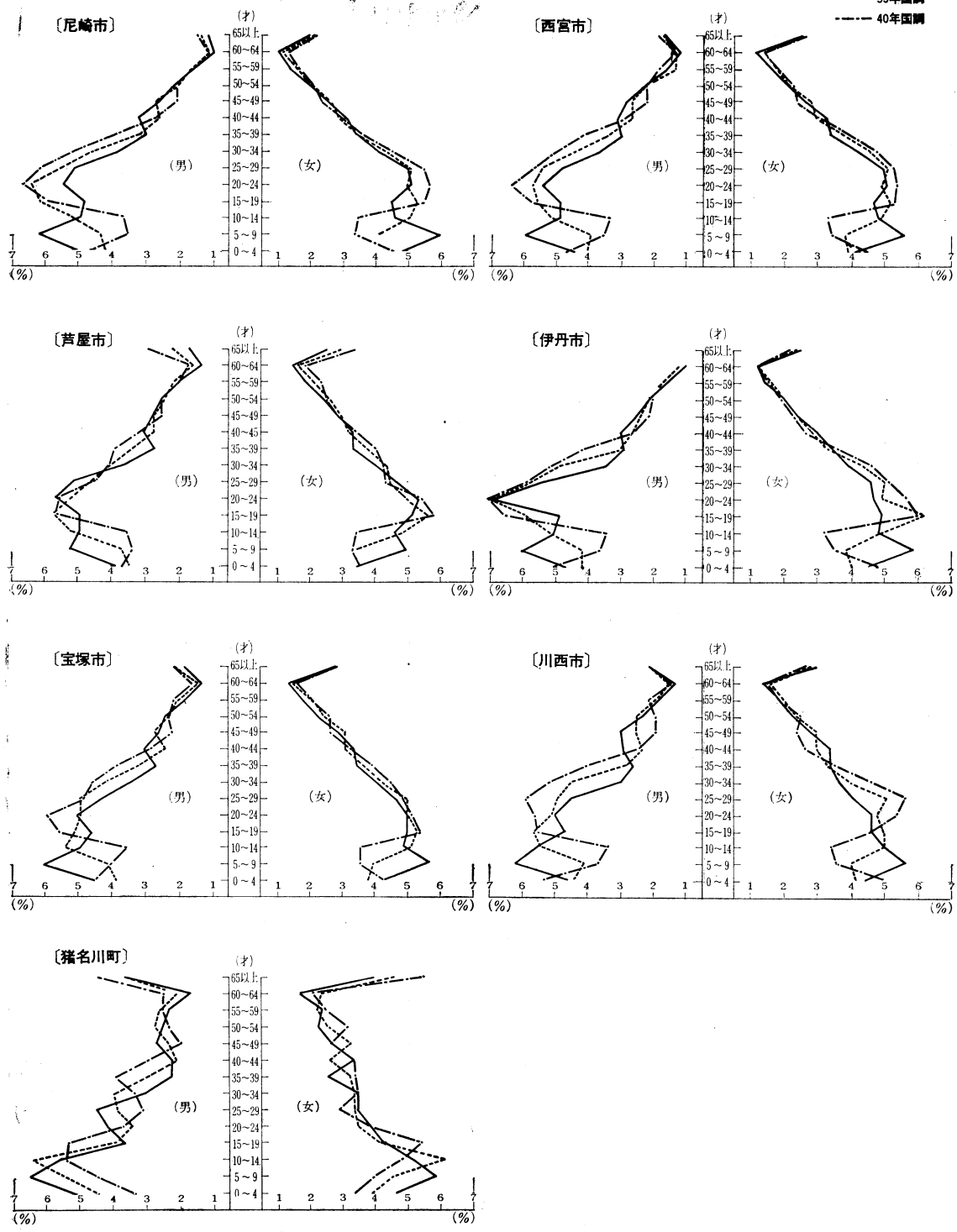
2) 年少人口指数 $\left(\frac{\text{年少人口}}{\text{生産総人口}}\right)$ 3) 老令人口

指数 $\left(\frac{\text{老令人口}}{\text{生産年令人口}}\right)$ 4) 老令化指数 $\left(\frac{\text{老令人口}}{\text{年少人口}}\right)$ をとりあげてみよう。

第 3 图

性別、年齢別人口構成

(注) ——— 30年国調
 - - - - - 35年国調
 - · - · - 40年国調



1) の負担係数が最も高いのは猪名川町でこれについて川西宝塚の順と成っている。芦屋市が比較的低いのは年齢人口が少ないためである。この点で最も優利な構造を示しているのは尼崎市である。

2) 年少人口指数が最も低いのは芦屋市の(28.8)で西宮市(30.9)がこれについて低い。逆に猪名川(39.3), 川西(34.4)が高く成っている。

3) 老令人口指数が高いのは猪名川(15.3)で次に芦屋(8.5), 宝塚(7.1)の順と成っている。最も低いのは尼崎市である。

4) 老令化指数からみると、最も若い都市は尼崎市(15.4)と伊丹市(16.1)で芦屋市(29.5)と猪名川(38.9)が格段に老化しているといえる。

以上の年齢別構成からみたかぎりではいえることは尼崎市、西宮市、伊丹市などが経済的に有利な構造をもち、逆に猪名川町は非常に不利な構造を示している。芦屋の場合には年少人口が少ない点では有利であるが、老令人口が多いのでその点で

は不利である。若年層の移入人口があまり期待出来ないとすれば、急速に老化し次第に不利な人口構造に成ることが予想される。

〔3〕人口動態

人口動態としては出生率、死亡率、自然増、社会増についてみていきたい。

(1) 出生・死亡・自然増加

第8表 全国の人口動態

年度	率	出生率	死亡率	自然増加率
1950		28.1	10.9	17.2
1955		19.4	7.8	11.6
1960		17.2	7.6	9.6
1965		18.6	7.1	11.4
1966		13.7	6.8	6.9
1967		19.7	6.7	13.0

資料：厚生省 人口動態統計

第9表 出生率

年度	市	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町
1955年		17.4	15.8	—	14.4	11.1	15.8	19.8
1960		17.9	15.6	17.7	15.7	14.0	18.8	16.3
1965		23.6	22.2	24.4	20.0	16.1	25.4	13.1
1966		16.8	16.1	17.7	14.8	11.3	19.5	9.4
1967		23.4	21.3	25.5	20.4	16.4	25.3	13.6
1968		22.4	20.5	23.8	21.3	17.1	26.9	14.2

第10表 死亡率

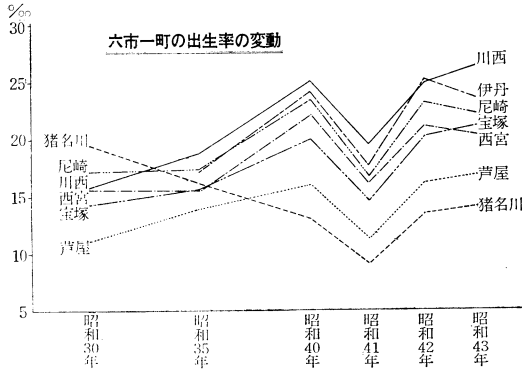
年度	市	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町
1955		5.8	6.6	—	6.6	4.9	7.0	10.1
1960		5.8	4.1	5.0	5.9	5.9	6.4	9.0
1965		4.8	4.9	4.1	4.7	5.0	5.4	10.9
1966		3.9	4.6	4.3	4.5	4.7	4.5	7.4
1967		4.0	4.4	4.0	5.0	4.6	4.9	8.0
1968		4.2	4.4	4.4	4.8	5.7	5.4	8.7

第11表 自然増

年度	市	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町
1955		12.3	9.7	—	7.6	6.2	8.6	9.6
1960		12.3	10.6	12.6	9.7	8.0	12.1	6.9
1965		18.8	17.2	20.3	15.3	11.1	19.6	2.2
1966		12.9	11.5	13.4	10.3	6.6	15.0	2.2
1967		19.4	16.9	21.5	15.4	11.8	20.4	5.6
1968		18.2	16.1	19.4	16.5	11.4	21.5	5.5

全国の出生率はここ数年、18前後で安定しており死亡率も6~7%で安定している。これに反して6市1町の出生率は60年から65年にかけて猪名川をのぞく各市において急激に増加している。これは出生児の増加というよりも、出産年令の女子の割合の増加という年令別・性別の人口構造の変化に原因が認められる。

第4図

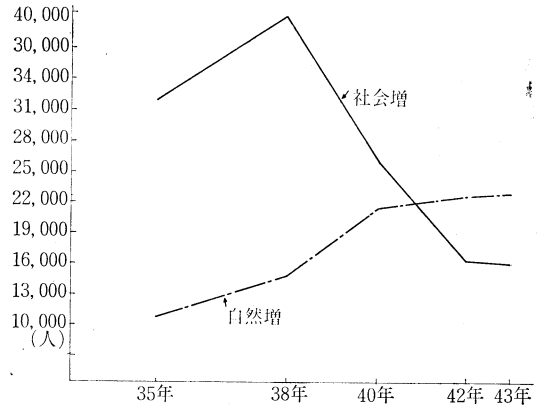


死亡率は4~5と全国平均よりもかなり低いところで安定していた。ただ芦屋市と川西がやや高く、猪名川が格段に高い。これは年令構造からくるものと思われる。

次に6市1町における自然増加率と社会的増加率の傾向はどのように成っているか。都市の人口は古典的には出生率が低い割に死亡率が高いため自然増加はきわめて少ないか、場合によっては減少する。ところが多数の社会増(転入人口)があるため、少ない自然増(場合によってはマイナス)を補って、急速な増加を示してきた。しかし今日においてはこのような事情は大きく変わりつつある。

日本の三大都市圏における自然増加率と社会増

第5図 6市1町村における自然増と社会の推移(六市一町合計)(実数)



第12表 自然増と社会増の推移(実数)(6市1町合計)

年度	昭和35年	昭和38年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
人口動態					
自然増	10,446	15,261	21,060	22,983	22,594
社会増	32,702	40,339	26,892	16,570	16,025

第13表 自然増と社会増の推移(実数)(尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市の合計)

年度	昭和35年	昭和38年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
人口動態					
自然増	9,273	13,320	18,421	19,922	19,086
社会増	28,442	31,035	21,242	8,605	7,208

加率についてみると、社会増加率は、30~35年に7.5であったものが35~40年には8.6%へと0.9%増加しているのに対して自然増加率は、5.3%から6.4%へ1.1%増加している⁽¹⁾。六市一町の自然増と社会増を対比してみると次の通りである。

1) 早くから社会減を示していた猪名川町では

①わが国の人口, p. 12-13.

第14表 阪神間6市1町における自然増加率と社会増加率の推移

年度	市		尼崎市		西宮市		芦屋市		伊丹市		宝塚市		川西市		猪川名町	
	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増	自然増	社会増
1960	12.3	41.1	10.6	28.0	8.0	14.9	12.6	43.4	9.7	39.4	12.1	37.6	6.9	△15.8		
1961	13.3	39.6	11.2	34.6	8.8	18.1	12.7	63.7	12.0	45.8	12.4	49.7	4.5	△12.3		
1962	13.6	36.5	12.0	34.6	8.5	14.9	14.3	69.3	11.1	53.2	15.2	63.9	3.6	△ 9.6		
1963	14.6	28.4	13.0	34.2	9.4	4.2	16.8	44.3	12.7	57.5	15.7	82.8	4.1	1.3		
1964	16.0	18.5	13.9	36.1	10.4	△ 7.1	16.8	53.8	14.5	56.9	18.0	40.0	6.5	2.3		
1965	18.7	16.0	17.2	22.2	11.1	1.6	20.0	45.3	15.1	46.2	19.6	36.5	2.2	13.1		
1966	13.0	9.1	11.4	3.2	6.5	4.1	13.2	39.0	10.2	57.7	14.8	32.2	2.0	0.6		
1967	19.4	7.4	16.9	8.4	11.8	△ 5.6	21.4	15.5	15.3	48.1	20.6	43.0	5.7	△ 0.9		
1968	18.2	0.3	16.1	12.4	11.4	1.1	19.4	18.5	16.5	42.2	21.5	54.3	5.4	△12.0		

資料：各市統計課 (△は減少) (注：伊丹市においては昭和44年度には再び社会増が自然増を上まわっている)

昭和35年以来ずっと自然増が社会増を大きく上まわっている。

- 2) その他の都市では昭和37年までは社会増が自然増を大きく上まわっていたが、昭和38年にまず芦屋市において自然増が社会増を上まわるようになった。
 - 3) 自然増が社会増を超える現象はつづいて昭和40年に尼崎にみられ、41年には西宮市、42年には伊丹市においても自然増が社会増を大きく上まわった。
 - 4) 宝塚市と川西市では依然として社会増が多いが、近い将来に逆転するのではないか。
- このような事実からみても、これから先の人口予測をする場合、社会増よりもむしろ自然増に注

目しなければならぬことがわかる。この点は特に強調しておきたい。

第15表 女子 (20才-44才) 1,000人当り子供数

(5才未満)

市	年度		
	昭和30年	昭和35年	昭和40年
尼崎市	466.3	390.6	417.5
西宮市	402.3	368.7	400.6
芦屋市	350.3	315.2	332.8
伊丹市	469.4	399.2	450.1
宝塚市	427.6	359.3	399.2
川西市	458.6	423.8	472.6
猪名川町	587.4	508.1	393.8

第16表 年令別特殊出生率 (40年)

年度	市	尼崎市	西宮市	芦屋市	伊丹市	宝塚市	川西市	猪名川町	全国
15~19		3.47	2.2	1.35	2.59	3.8	3.1	0	3.3
20~24		101.9	93.3	71.7	121.2	91.2	144.8	126.8	112.3
25~29		216.9	215.1	191.8	228.8	197.8	218.1	199.0	203.1
30~34		102.1	95.9	81.5	88.1	85.6	82.8	72.5	86.4
35~39		23.6	18.2	10.9	21.5	17.1	15.3	8.29	19.4
40~44		5.2	2.3	1.8	3.3	1.6	1.8	0	3.0

(2) 子供数と特殊出生率
粗出生率は、人口構造の違いを考慮していない

から、出生力の精密な論議は不可能である。そこでこれを補うために第15表に20才~44才までの女

子1,000人当りの5才未満の子供の割合を示した。これによると、30年から35年にかけて全般的に子供数が減少している。しかし40年ではこれがかなり回復している。西宮、芦屋、伊丹は、ほとんど35年に近づいている。川西だけが35年以上に増加しているのが注目される。猪名川だけが激減しているが目立っている。

次に最近の出生率を最も正確に表すのは、第16表のこの年令別特殊出生率である。これによると伊丹と川西の二市では29才以下の若い層で出生率が高い。尼崎と西宮両市の場合には25~34才までのところで多く成っている。芦屋市は、24才以下の若年層できわめて少なくなっている。猪名川の場合には29才以下では、普通であるが、30才以上の層で特に低く成っている。

人口動態の観点から出た結果を要約すると

- 1) 尼崎・西宮・伊丹の三市はかなり共通な性格をもっている。出生率も死亡率もほとんど類似しており、自然増もきわめて近似している。自然増が社会増を上回っている点でも共通している。
- 2) これに対して宝塚市と川西市は依然として社会増が自然増を大きく上回っている点で共通している。六市一町の中でこれらの市は急速に社会増をつづけている。
- 3) 芦屋市の場合には高度に都市化した都市と

して特異な性格を示している。出生率が低く、自然増加も最低である。また社会増も少ない。すでに昭和38年において自然増が社会増を上回った点も特異である。

- 4) 猪名川町は他市とは全く性格を異にし、過疎町の性格を示している。しかし今後の地域開発によって大きく変化することが予想される。

〔4〕 産業別及び職業別人口の構成

(1) 産業別

人口と産業構造の接点として、国勢調査では産業別人口構成をとっているが、ここで6市1町の産業別人口構成についてみよう。まず全国の第1・2・3三次産業別についてみると

第17表 全国、市部、大都市の産業別人口構成比

産業別 年度	第1次産業			第2次産業			第3次産業		
	全国	市部	6大都市	全国	市部	6大都市	全国	市部	6大都市
1950	48.3	13.8	3.9	21.9	35.2	39.0	29.8	51.0	57.2
1955	41.0	22.0	2.8	23.5	30.7	39.4	35.5	47.3	57.8
1960	32.6	17.8	1.7	29.2	35.7	44.5	38.2	46.5	53.7
1965	24.7			31.9			43.4		

資料：国勢調査書

第18表 6市1町の産業別人口構成

市 年度	尼崎市			西宮市			芦屋市			伊丹市			宝塚市		
	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次
1955	3.6	49.0	47.4	5.3	35.9	60.8	1.9	30.9	67.2	12.9	40.8	46.3	17.4	25.9	56.7
1960	1.8	55.9	42.3	2.8	41.3	55.9	1.5	32.5	66.0	7.0	49.8	43.2	11.4	31.7	56.9
1965	1.2	53.9	44.9	1.9	39.1	59.0	1.0	31.6	67.4	4.4	52.3	43.3	7.5	33.7	58.8

市 年度	川西市			猪名川町		
	第1次	第2次	第3次	第1次	第2次	第3次
1955	17.8	36.9	45.3	69.1	10.8	20.1
1960	10.3	44.2	45.5	56.9	18.6	24.5
1965	6.2	45.8	48.0	47.0	18.3	34.7

全国的にみれば第一次産業人口の減退と二次、三次産業人口の増加の傾向がみられる。

六市一町についてみると、
尼崎市の場合には第二次産業が第三次産業を上回っているため第二次型の都市である。最近の動きとしては、建設業ののびが目立っている。

伊丹市は第二次産業が最も高く、急速にのびつつある。建設業も製造業もともに大きなのびをみせている。

宝塚市は第三次産業が58.8%であるのに第二次産業は33.7%と第三次型を示している。

第19表 産業別人口構成比 (大分類) (夜間)

市	年度	産業別		第2次産業					第3次産業					
		第1次産業	第2次産業	鉱業	建設業	製造業	計	卸売業	小売業	銀行、保険業	運輸通信	電気、ガス水道業	サービス	公務
尼崎市	昭和30年	3.6	0.12	5.35	43.56	49.0	19.5	2.7	8.2	0.0	12.6	4.4	0.0	47.4
	昭和35年	1.8	0.1	8.3	47.6	55.9	18.5	2.6	6.3	1.1	11.4	2.3	0.0	42.2
	昭和40年	1.2	0.05	9.1	44.7	53.9	19.8	3.5	7.0	0.8	11.8	2.0	0.0	44.9
西宮市	昭和30年	5.3	0.15	6.57	29.24	35.9	21.9	5.8	10.1	0.0	16.5	4.5	0.0	58.8
	昭和35年	2.8	0.2	8.4	32.7	41.3	21.4	5.9	8.0	1.6	15.8	3.2	0.0	55.9
	昭和40年	1.9	0.1	8.2	30.7	39.1	23.8	6.9	8.1	1.5	15.7	2.9	0.0	59.0
伊丹市	昭和30年	12.9	0.21	3.38	37.25	40.8	13.1	2.6	5.7	0.0	11.9	12.9	0.0	46.3
	昭和35年	7.0	0.1	5.8	43.9	49.8	14.2	3.0	4.9	0.7	11.3	9.2	0.0	43.2
	昭和40年	4.4	0.02	6.3	46.0	52.3	15.2	3.5	5.3	0.6	10.9	7.7	0.0	43.3
宝塚市	昭和30年	17.4	0.14	5.81	20.04	25.9	18.0	4.9	7.2	0.0	21.5	4.9	0.0	56.7
	昭和35年	11.4	0.4	8.4	22.9	31.7	19.6	5.2	6.8	0.8	22.2	2.3	0.0	56.9
	昭和40年	7.5	0.1	8.7	24.9	33.7	21.1	6.5	6.7	1.0	21.0	2.3	0.1	58.8
芦屋市	昭和30年	1.9	0.21	5.12	25.58	30.9	26.0	8.0	8.1	0.0	20.0	5.0	0.0	67.2
	昭和35年	1.5	0.012	7.1	25.3	32.5	25.7	8.4	6.2	0.8	20.7	4.2	0.0	66.0
	昭和40年	1.0	0.1	6.5	25.0	31.6	28.4	8.5	6.3	0.6	19.5	4.1	0.0	67.4
川西市	昭和30年	17.8	0.11	4.18	32.59	36.9	17.2	3.1	8.0	0.0	14.0	3.1	0.0	45.3
	昭和35年	10.3	0.1	5.6	38.4	44.2	17.8	3.1	7.4	0.6	14.0	2.7	0.0	45.6
	昭和40年	6.2	0.1	7.2	38.6	45.8	18.9	4.6	7.3	0.6	14.0	2.6	0.1	48.0
猪名川町	昭和30年	69.1	0.38	3.35	7.09	10.8	5.2	1.0	4.1	0.0	8.0	1.8	0.0	20.1
	昭和35年	56.9	0.2	5.6	12.8	18.6	7.1	0.8	4.4	0.3	9.8	2.1	0.0	24.5
	昭和40年	47.0	0.9	4.1	13.3	18.3	8.3	2.2	7.2	0.3	14.4	2.3	0.1	34.7
合計	昭和30年	7.3	0.15	5.43	35.29	40.9	19.6	4.0	8.3	0.0	14.7	5.2	0.0	51.8
	昭和35年	18.5	0.1	7.9	39.5	47.5	19.2	4.1	6.7	1.1	14.0	3.3	0.0	48.4
	昭和40年	2.8	0.1	8.3	38.1	46.4	20.8	5.0	7.1	1.0	13.9	3.0	0.0	50.8

産業別人口構成比 (昭和40年・昼間)	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町
第1次産業	1.4	3.3	5.4	11.8	2.1	12.2	66.8
第2次産業	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	1.3
建設業	8.7	10.5	6.1	11.1	12.1	1.5	4.0
製造業	49.8	27.1	51.3	20.8	7.3	31.0	3.1
計	58.6	37.7	57.4	32.0	19.4	32.6	8.4
卸売業	16.2	22.3	12.6	15.8	24.4	19.3	7.3
小売業	2.4	3.2	1.4	1.7	3.8	2.3	0.1
銀行、保険業	6.4	7.1	4.6	5.8	7.8	4.0	2.0
運輸通信	1.1	1.6	0.5	0.4	0.6	0.4	0.0
電気、ガス水道業	12.0	21.3	9.7	30.2	33.0	19.2	12.9
サービス	2.1	3.4	8.4	2.1	9.0	2.9	2.5
公務	0.03	0.1	0.1	0.1	0.04	0.1	0.1
分類不能	40.2	59.0	37.3	56.1	78.9	48.2	24.9

しかし建設業、製造業も次第に増加しているところから、次第に第二、三次の混合型に移行する可能性をみせている。

西宮市は同じく第三次型の都市であるが、最近の動きとしては却売・小売業および金融・保険・不動産業などの増加がみられる。芦屋市の場合に

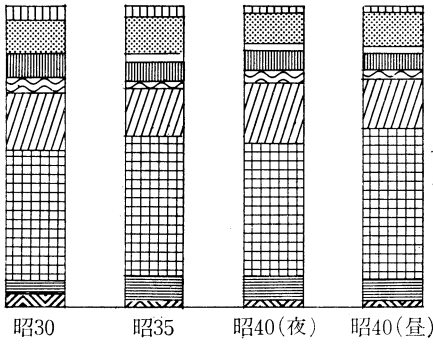
は第三次産業が67.4%と最高である。第三次型の都市として安定している。

川西市の場合には、第二次と第三次産業がほぼ相仲ばする混合型の都市である。最近では建設業と却売・小売業および金融・保険・不動産業の増加が目立っている。

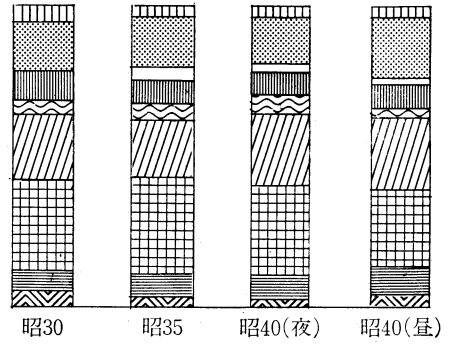
第 6 図

§ 産業別就業者率

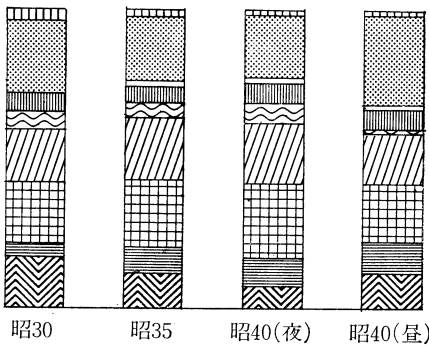
尼崎市



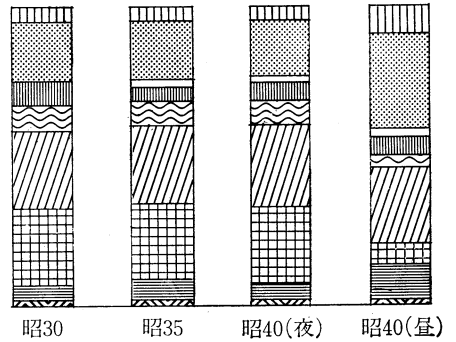
西宮市



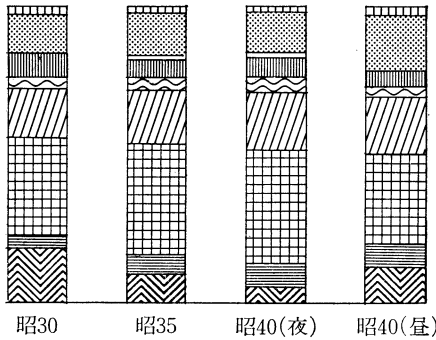
宝塚市



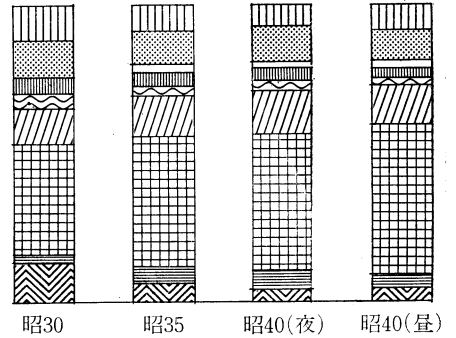
芦屋市



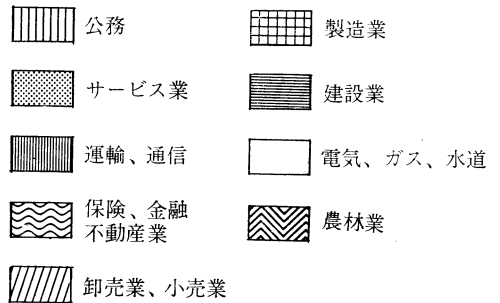
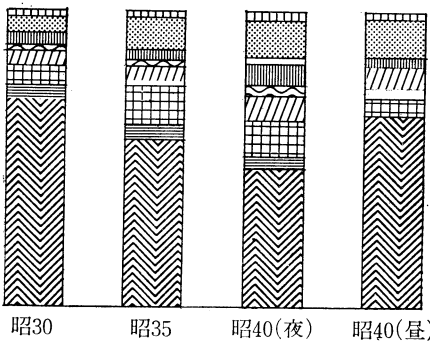
川西市



伊丹市



猪名川



(2) 事業所統計

次に事業所統計を用いて38年から41年にかけての事業所および従業員の伸び率についてみると、「事業所」の伸びが高いのは、伊丹、川西の両市であるが、従業者でのびているのは伊丹、川西について宝塚である。

各業種別にみると、「建設業」は「事業所」と「従業員」がいずれものびているのは、西宮、伊丹の2市である。「製造業」の場合にはどちらも宝塚、伊丹がのびている。「卸小売」の事業所は伊丹、川西でのびている。従業員でも伊丹市ののびが高い。「金融保険業」の事業所は伊丹、宝塚ののびが高いが、従業者では伊丹と西宮がのびている。「不動産業」ののびは、事業所では伊丹、川西、宝塚の順と成っている。「運輸通信業」は事業所でみると、伊丹市が断然大きく、西宮がこれについている。従業員でみると宝塚、伊丹市がのびている。「電気・ガス・水道」は「事業所」でみると宝塚、西宮でのびており、従業員でみると川西、伊丹ののびが大きい。「サービス業」では川西と伊丹ののびが大きい。全般的にみて伊丹市、川西市、宝塚などののびが大きいのが目立っている。

第20表 事業所統計による各業種別の伸び率 (昭和38年を100とした昭和41年指数)

産業別	市別					
	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市
建設業	165	228	211	154	139	137
製造業	140	119	263	139	79	134
卸、小売業	116	120	138	119	104	141
金融、保険業	122	128	144	133	91	95
不動産業	126	318	454	372	209	395
運輸通信業	156	181	609	132	110	127
電気、ガス水道	74	145	117	160	112	100
サービス業	121	142	152	103	100	153
合計	121	136	157	122	106	149

(3) 産業機能別にみた型

産業別構成比をみる場合これまで第一次産業を加えて論じて来たが、都市的産業の比率は7.4%以下となっている。したがって第1次産業を除

(従業者数)

産業	市	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市
建設業		198	208	224	131	102	161
製造業		119	118	172	217	116	—
卸、小売業		144	147	168	133	119	—
金融、保険業		188	208	218	168	177	186
不動産業		152	209	216	291	312	445
運輸通信業		182	135	381	403	177	—
電気、ガス水道		74	113	175	155	158	194
サービス業		140	159	159	127	133	206
合計		133	143	179	154	128	171

き、純粹に都市的機能として第2、3次機能を精密に比較する必要がある。各都市について次の機能を比較してみよう。

- (I) 建設業、製造業
- (C) 卸売業・小売業・金融業・不動産業
- (S) 電気・ガス・水道・サービス業
- (A) 公務
- (T) 運輸・通信業

昭和35年における各市の割合は次の通りである。(第21表)

第21表 各市の機能 (昭和35年)

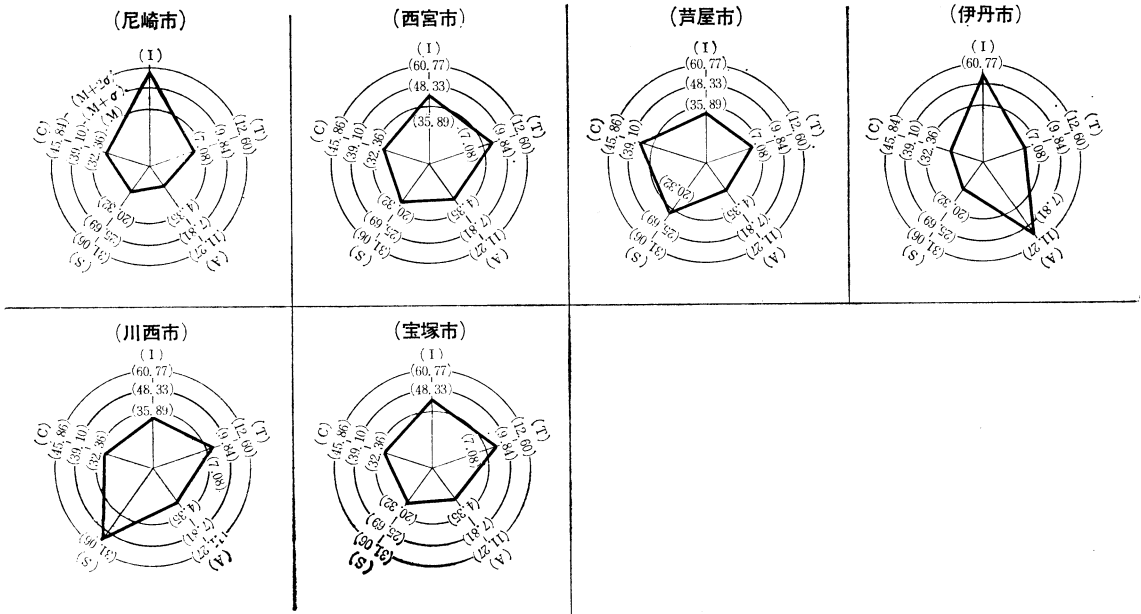
機能	市町別	尼崎市	西宮市	芦屋市	伊丹市	宝塚市	川西市
I	35年	57.3	41.9	33.6	53.5	31.5	42.4
C	35年	21.5	29.0	35.4	18.5	31.8	31.2
S	35年	12.6	17.7	21.7	12.9	26.6	16.2
A	35年	2.2	3.3	2.8	9.9	2.4	2.7
T	35年	6.4	8.1	6.5	5.3	7.7	7.6

第22表 分類の基準 (昭和35年)

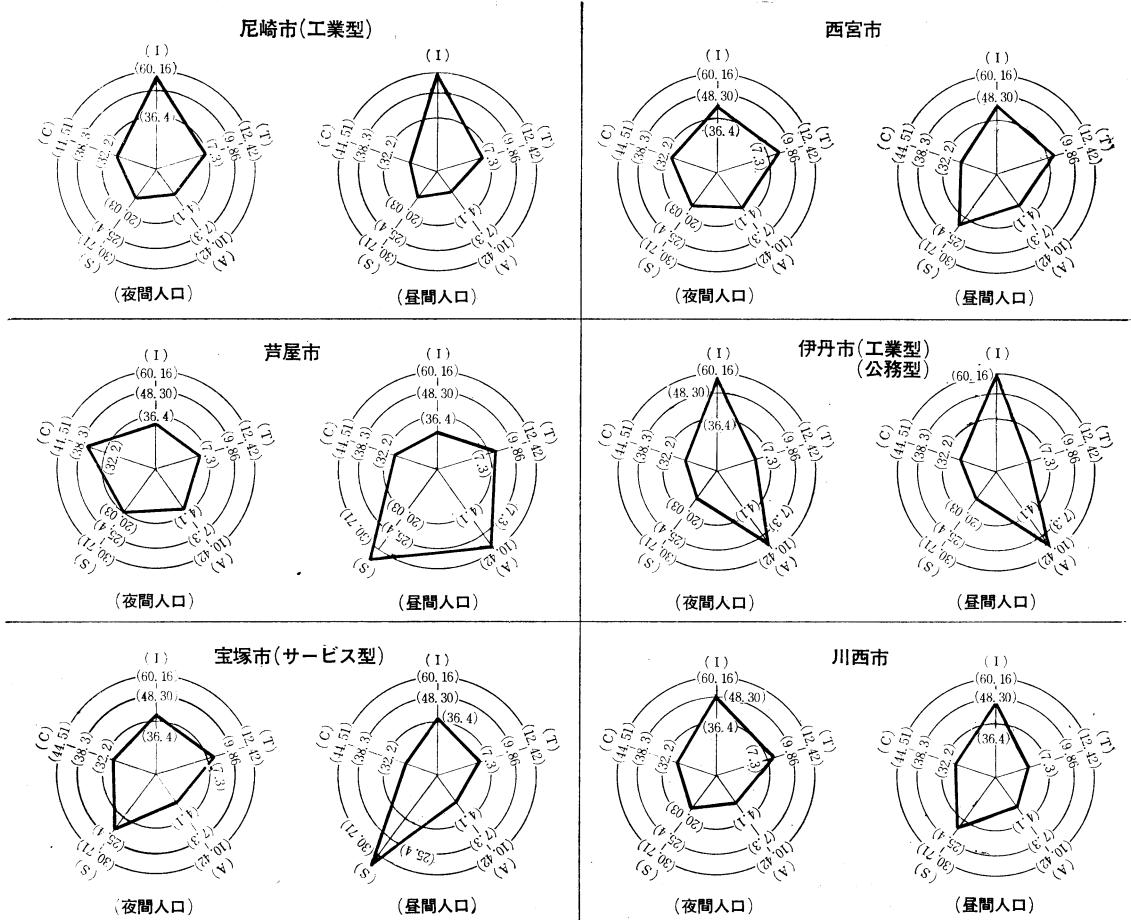
機能	レベル	優位	かなり特化	高度の特化
I	35年	35.9	48.3	57.0
C	35年	32.4	39.1	43.8
S	35年	24.7	25.7	29.5
A	35年		7.8	10.3
T	35年	7.1	9.8	11.8

これらを全国平均および標準偏差を計算して分類の基準を示したのが第22表である。これにもと

都市機能図 昭和35年 第7図



昭和40年



ずいて6市の産業機能を示したのが、第7図である。これによると、

尼崎市は「高度に特化した工業都市」である。

西宮市は「標準型」の都市であるが、(I)と(T)が比較的多い。

芦屋市は「標準型」の都市であるが、(C)と(S)が比較的多い。

伊丹市は「かなり特化した工業・公務型」の都市である。

宝塚市は「かなり特化したサービス型」の都市である。

川西市は標準型の都市であるが、(I)と(T)がいくらか多く成っている。

次に昭和40年の夜間人口と昼間人口の構成比を示すと第7図の通りである。

昭和35年と40年を比較してみると、

尼崎市は高度に特化した工業型の都市であるが35年と40年の間に大きな差はみられないが、昼間人口の方が工業への集中度が高く成っている。

西宮市は標準型の都市であるが、工業と運輸にいくらか集中している。昼間人口の場合にはサービスの比率が増している。

芦屋市の場合は標準都市で35年と40年の間に変化はないが昼間人口の産業構成はサービスに大きく比重がかかっている。昼間人口では「サービス型」都市である。

伊丹市は「かなり特化した工業・公務」都市であるが、昼間人口でみると「高度に特化した工業都市・かなり特化した公務都市」と成る。

宝塚市は35年では「かなり特化したサービス型都市」であったが、40年の夜間人口では工業のウエイトが増してサービスのウエイトは減じているしかし昼間人口でみると高度に特化したサービス都市である。

川西市は標準都市であるが工業と運輸にいくらか特化している。昼間人口をとると、工業とサービスにいくらか比重のかかった都市である。

(4) 職業別

次に職業別についてみると、いま職業分類のうち、①専門・技術職業、②管理的職業、③事務職をホワイトカラーとし、次にブルーカラーとして④技能工・生産工程従事および他に分類されない単純労働者を取りあげこれを対比させてみよう。

第23表 分類の基準 (昭和40年)

機能 \ レベル	優 位	かなり特化	高度の特化
I	36.4	48.3	56.6
C	32.2	38.3	42.7
S	24.2	25.4	29.1
A		7.3	9.5
T	7.3	9.9	11.7

第24表 各市の機能 昭和40年 (夜間)

機能 \ 市	尼崎市	西宮市	芦屋市	伊丹市	宝塚市	川西市
I	54.6	39.8	32.5	53.5	33.8	45.6
C	23.7	31.9	38.4	20.5	31.9	28.9
S	12.7	17.2	20.0	12.0	24.6	15.2
A	1.9	3.0	2.6	8.7	2.4	2.6
T	7.0	8.2	6.5	5.3	7.3	7.7

第25表 昭和40年 (昼間)

機能 \ 市	尼崎市	西宮市	芦屋市	伊丹市	宝塚市	川西市
I	59.4	39.0	19.8	60.6	36.2	45.1
C	18.9	26.4	28.8	14.8	19.9	24.6
S	13.3	23.7	34.3	10.8	34.7	22.4
A	2.1	3.5	9.2	8.9	2.4	3.3
T	6.5	7.4	8.0	4.9	6.6	4.6

芦屋市は専門技術の割合がずば抜けて多いのでエリートの都市であるといえよう。

西宮市と宝塚市はホワイトカラーの割合が多いので、ホワイトカラーの市であるとみることが出来る。

尼崎市、伊丹市、川西市は、ブルーカラーが40%以上を占めているので、ブルーカラーの市であるといえよう。(第27表)

第26表 職業別就業者数

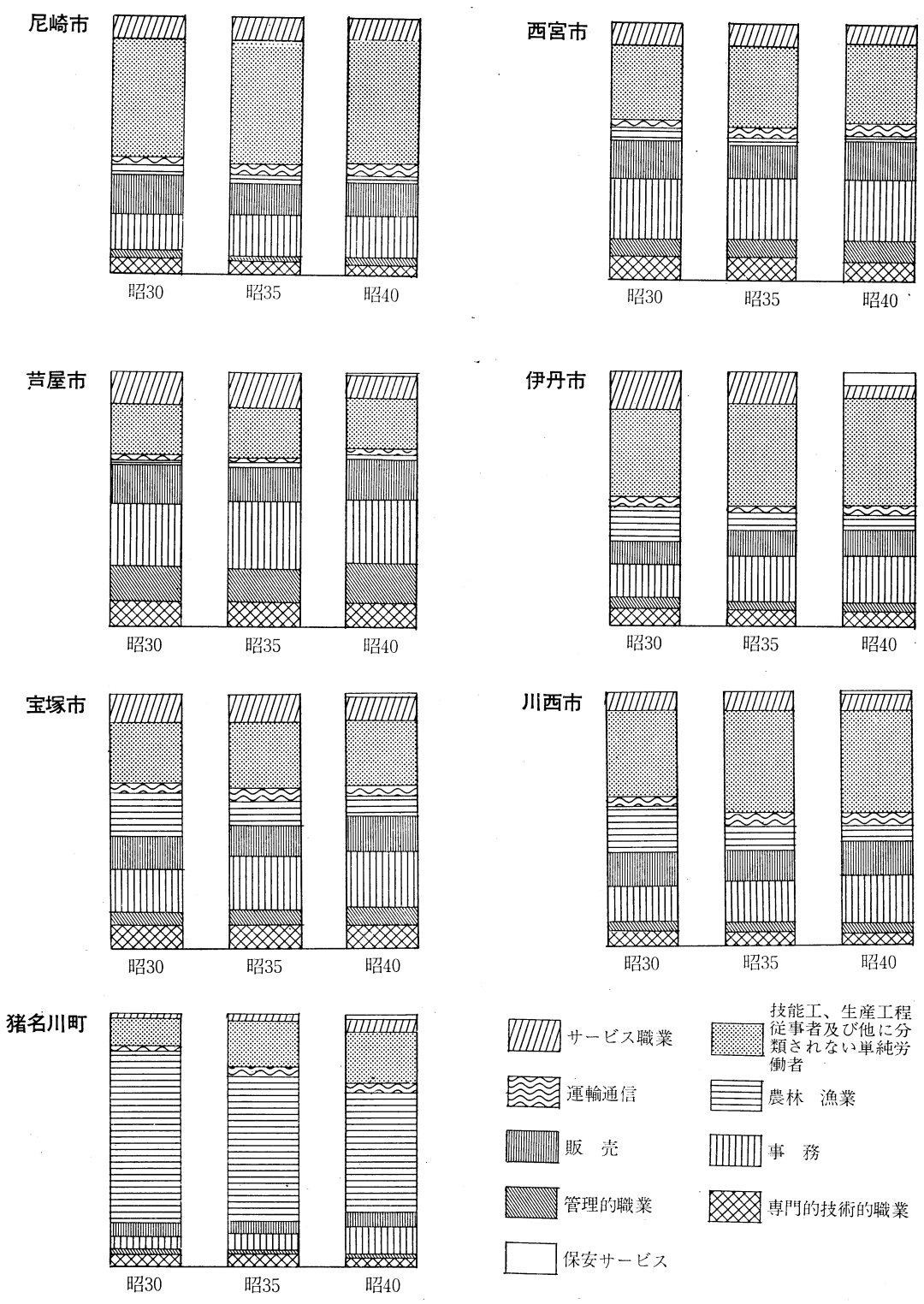
市	年度	職業別											
		総数	専門的 技術的 職業	管理的 職業	事務	販売	農業 漁業	採鉱 採石	運輸 通信	技能工・生産工 程従事者及び に分類されない 単純労働者	サービス 職業	分類 不能	保安サ ービス
尼崎市	昭和30年	100	5.9	3.2	14.9	14.7	3.6	0.1	3.0	46.0	8.6	0.0	
	昭和35年	100	4.9	2.7	15.5	12.1	1.9	0.0	4.7	50.8	7.9	0.0	
	昭和40年	100	4.5	3.1	16.2	13.2	1.2	0.0	5.0	48.4	7.3	0.0	1.1
西宮市	昭和30年	100	8.7	7.8	22.6	14.9	5.1	0.1	2.6	29.0	9.2	0.0	
	昭和35年	100	8.7	7.0	23.9	13.7	3.0	0.3	3.8	31.2	8.4	0.0	
	昭和40年	100	7.8	7.8	23.7	15.3	1.9	0.0	4.2	31.2	7.2	0.0	0.9
伊丹市	昭和30年	100	6.8	3.5	15.0	10.0	12.9	0.1	2.1	34.9	14.7	0.0	
	昭和35年	100	6.5	3.0	17.0	9.5	7.0	0.1	3.3	40.9	12.7	0.0	
	昭和40年	100	5.9	3.5	18.2	10.7	4.3	0.0	4.1	42.4	5.4	0.0	5.5
宝塚市	昭和30年	100	8.6	6.3	16.7	12.8	17.5	0.1	2.3	24.4	11.3	0.0	
	昭和35年	100	8.6	6.2	20.6	12.1	11.6	0.3	4.0	25.5	11.1	0.0	
	昭和35年 昭和40年	100	8.5	7.7	21.9	13.4	7.9	0.0	4.0	26.2	9.5	0.0	0.9
芦屋市	昭和30年	100	9.9	13.8	24.4	14.7	1.9	0	2.1	20.5	12.7	0.0	
	昭和35年	100	9.7	12.6	26.1	14.0	1.3	0	2.7	20.7	12.9	0.0	
	昭和40年	100	9.9	13.5	24.9	16.3	0.9	0	2.8	19.7	9.6	0.0	2.4
川西市	昭和30年	100	6.0	4.2	14.1	13.2	17.7	0.1	3.5	34.2	7.0	0.0	
	昭和35年	100	5.4	3.4	16.5	11.9	10.3	0.1	4.6	39.5	8.3	0.0	
	昭和40年	100	5.2	3.6	19.1	12.8	6.2	0.0	4.9	40.1	6.9	0.0	1.2
猪名川町	昭和30年	100	5.5	0.8	5.1	4.6	68.7	0.3	1.7	11.3	2.0	0.0	
	昭和35年	100	5.1	0.9	6.5	5.5	57.0	0.1	3.4	19.0	2.5	0.0	
	昭和40年	100	4.5	0.9	10.1	6.0	46.7	0.7	5.3	19.9	5.1	1.0	0.8
合計	昭和30年	100	7.2	5.4	17.6	14.0	7.3	0.1	2.7	36.2	9.5	0.0	
	昭和35年	100	6.7	4.7	18.9	12.3	4.1	0.1	3.9	40.3	9.0	0.0	
	昭和40年	100	6.1	5.3	19.4	13.6	2.8	0.0	4.5	39.4	7.4	0.0	1.5
全国平均	昭和40年	100	5.6	3.0	13.0	11.7	24.5	0.5	4.4	30.1	6.0	0.0	1.2

第27表 (専門管理) ホワイトカラー、ブルーカラー

市	年度	(専門管理)	ホワイト カラー	ブルーカラー
尼崎市	1955	(9.1)	23.0	46.0
	1960	(7.6)	23.1	50.8
	1965	(7.6)	23.8	48.4
西宮市	1955	(16.5)	39.1	29.0
	1960	(15.7)	39.6	31.2
	1965	(15.6)	39.3	31.2
芦屋市	1955	(23.7)	48.1	20.5
	1960	(22.3)	48.4	20.7
	1965	(23.4)	48.3	19.7

市	年度	(専門管理)	ホワイト カラー	ブルーカラー
伊丹市	1955	(10.3)	25.3	34.9
	1960	(9.5)	26.5	40.9
	1965	(9.4)	27.6	42.4
宝塚市	1955	(14.9)	31.6	24.4
	1960	(14.8)	35.4	25.5
	1965	(16.2)	38.1	26.2
川西市	1955	(10.2)	24.3	34.2
	1960	(8.8)	25.3	39.5
	1965	(8.8)	27.9	40.1
猪名川町	1955	(6.3)	11.4	11.3
	1960	(6.0)	12.5	19.0
	1965	(5.4)	15.1	19.9

職業別就業者率 第8図



第28表 昼夜間人口および流入、人口

市	人口		C 流入人口	D 流出人口	E (D-C) 流出超過 人口	F (A+C-D) 昼夜間人口	G (B+C-D) 就業人口 (昼間)	H (F) 人口指数	I (G) (B)	$\frac{C}{A} \times 100$	$\frac{D}{A} \times 100$	$\frac{C}{B} \times 100$ 流入比	$\frac{D}{B} \times 100$ 流出比	$\frac{C+D}{B} \times 100$ 流動性指数	
	A 夜間人口	B 就業人口 (夜間)													
尼崎市	昭和30年	335,513	130,509	26,683	40,782	14,099	321,414	116,410	95.6	89.2	7.9	12.2	20.4	31.2	51.7
	昭和35年	405,955	184,611	42,149	65,929	23,780	382,175	161,231	93.8	87.3	10.4	16.2	22.8	35.7	58.5
	昭和40年	500,990	241,810	56,979	96,431	39,452	461,538	202,908	92.5	83.7	11.4	19.2	23.6	39.9	63.4
西宮市	昭和30年	210,179	79,704	12,871	38,952	26,081	184,098	53,623	85.8	67.3	6.1	18.5	16.1	48.9	65.0
	昭和35年	262,608	111,947	29,423	64,903	35,480	227,128	76,467	84.4	68.3	11.2	24.7	26.3	58.0	84.2
	昭和40年	336,873	151,195	43,744	97,497	52,752	284,120	97,445	81.4	64.4	13.0	28.9	28.9	64.5	93.5
伊丹市	昭和30年	68,982	28,365	5,383	10,134	4,751	64,231	23,614	92.6	83.3	7.8	14.7	19.0	35.7	54.7
	昭和35年	86,455	40,446	10,012	17,829	7,817	78,638	32,629	90.1	80.7	11.6	20.6	24.8	44.1	68.8
	昭和40年	121,380	59,394	14,874	28,940	14,066	107,314	45,328	86.9	76.3	12.3	23.8	25.0	48.7	73.7
宝塚市	昭和30年	55,084	20,979	2,427	8,855	6,428	48,656	14,551	86.8	69.4	4.4	16.1	11.6	42.2	53.7
	昭和35年	66,491	28,239	4,873	17,247	12,374	54,117	15,865	77.1	56.2	7.3	25.9	17.3	61.1	78.3
	昭和40年	91,486	40,006	8,443	27,285	18,842	72,644	21,221	74.1	53.0	9.2	29.8	21.1	68.1	89.2
芦屋市	昭和30年	50,960	19,366	2,118	12,264	10,146	40,814	9,220	75.1	47.6	4.2	24.1	10.9	63.3	74.2
	昭和35年	57,050	23,428	5,534	17,993	12,459	44,591	10,969	72.1	46.8	9.7	31.5	23.6	76.8	100.4
	昭和40年	63,195	27,010	9,217	21,975	12,758	50,437	14,252	74.7	52.8	14.6	34.8	34.1	81.4	115.4
川西市	昭和30年	35,158	13,495	1,145	6,401	5,256	29,902	8,239	82.4	61.1	3.3	18.2	8.5	47.4	55.9
	昭和35年	41,916	18,238	1,815	11,964	10,148	31,768	8,089	68.1	44.4	4.3	28.5	10.0	65.6	75.5
	昭和40年	61,282	28,183	2,825	20,144	17,319	43,963	10,864	60.6	38.5	4.6	32.9	10.0	71.5	81.5
猪名川町	昭和30年	7,610	3,850	32	424	329	7,218	3,458	94.6	89.8	0.4	5.6	0.8	11.0	11.8
	昭和35年	7,178	3,498	60	866	806	6,372	2,692	87.4	77.0	0.8	12.1	1.7	24.8	26.4
	昭和40年	7,038	3,629	179	1,409	1,230	5,808	2,399	78.8	66.5	2.5	20.0	4.9	38.8	43.7
合計	昭和30年	763,486	296,268	50,659	117,812	67,153	696,333	117,812	90.4	80.4	6.6	15.4	10.1	21.2	24.8
	昭和35年	927,653	410,407	93,867	196,731	102,864	824,789	196,731	87.5	77.5	10.1	21.2	10.1	21.2	24.8
	昭和40年	1,182,244	551,284	136,261	293,681	157,420	1,024,824	293,681	84.6	71.5	11.5	24.8	11.5	24.8	24.8

〔5〕人口流動とそのパターン

現代都市，ことに大都市圏における最も大きな特徴は，都市間の大量の人口流動現象である。都市化が一定の高さに達し，交通機関が整備されると郊外化がすすみ，都市は自己の市域内だけでなく，市域外の地域から大量の通勤者を日常的に受入れることに成る。

阪神地域は日本で最初に郊外化がすすんだ地域である。すなわち大正期に国鉄・阪神・阪急の開通によって大阪・神戸の高級住宅地として開発がすすんだ。住宅地化は戦後の急速な都市化によって飛躍的にすすみ，通勤現象が一般化してきた。次に通勤・通学などの都市間の人口流動についてみよう。(第29表・第30表)

「尼崎市」は昼間人口指数が 92.5，就業者昼間人口指数 83.7と6市1町の中で最も高い。流動性指数 $\frac{\text{流出人口} + \text{流入人口}}{\text{(夜間) 就業人口}} \times 100$ は 63.4 で猪名川町について低い，したがって6市1町内では流動の割合が猪名川について少ない中心都市である。しかし流動性は次第に高まる傾向にある。すなわち流出比も流入比もともに高く成りつつある。

「西宮市」は昼間人口指数 81.4，就業者昼間人口指数 64.4 と尼崎にくらべるとかなり低くなっている。流動性指数は 93 と芦屋について第2位にある。流入比にくらべて流出比がきわめて高く，典型的な住宅都市である。

「伊丹市」は昼間人口指数 86.9，就業者昼間人口指数 76.3 と尼崎市について高い。流動性指数は 73.7 で5位と6市の中では流動性が低い。流入比にくらべ流出比が高いのは，西宮市と同様住宅都市的な性格も備えていることを示している

「宝塚市」は昼間人口指数 74.1，就業者昼間人口指数 (53.0) とともに川西市について低い。流動性指数でみると 89.2 と第3位である。すなわちきわめて流動性の高い都市である。流入比にくらべて流出比がきわめて高く，住宅都市の性格を示している。

「芦屋市」は昼間人口指数 74.7，就業者昼間人口指数 52.8 と低い。流動性指数でみると 115 と最も高い。流入人口にくらべて流出人口がきわめて高く住宅都市の性格が強い。

「川西市」は昼間人口指数が最も低く，流動性指数も 81.5 と第4位にある。流動性の高い都市でしかも流入にくらべて流出がきわめて多い住宅都市である。

「猪名川町」は流動性が 44.0 と最も低い。流動性の低い町である。流入よりも流出が多い。

6市1町の人口の流動性は例外なく高まりつつある。ことに流動性指数ののび率をみると，猪名川町の 400 をのぞけば，宝塚市 (169)，芦屋市 (150)，川西市 (145)，西宮市 (143) などが速いのび率を示している。

流入比は芦屋市の場合をのぞけば大きくのびていない。

流出比は各市町ともかなりののびを示している

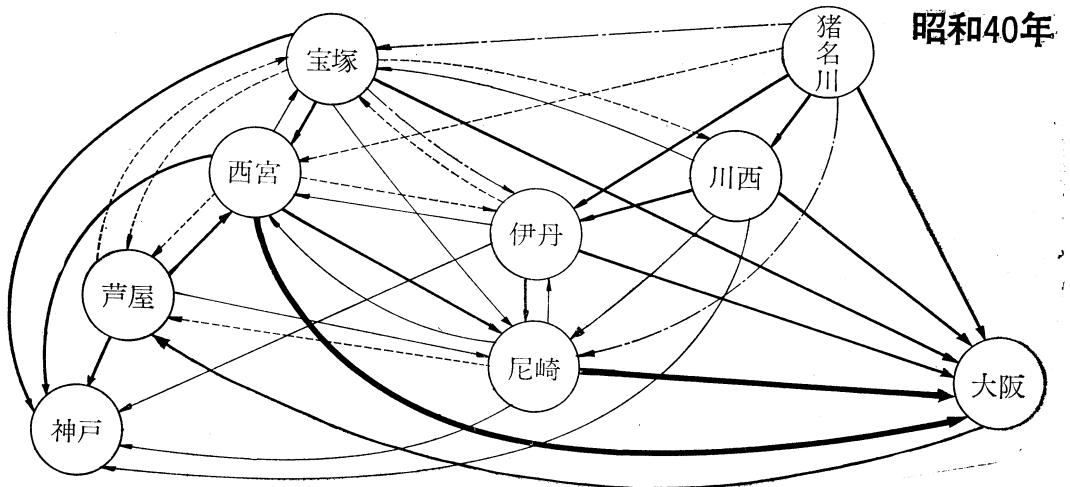
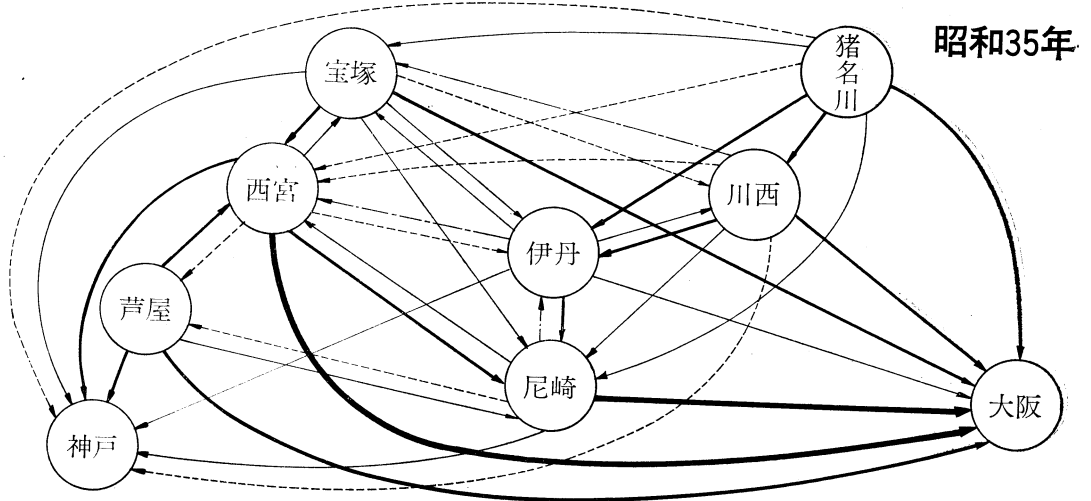
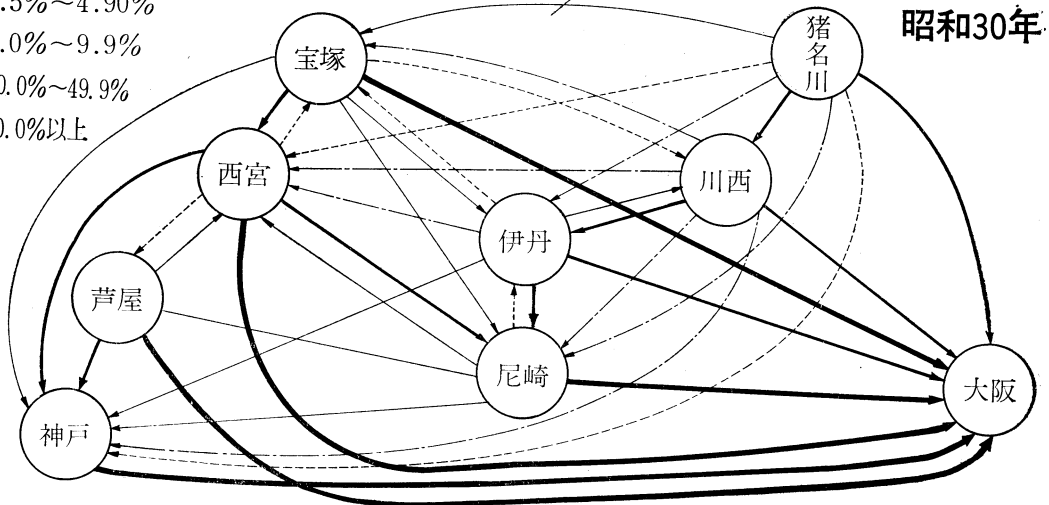
次に都市間の流動のパターンを大雑把に示すと9図のようになる。またその特徴を要約すると

- 1) 流出には一定のパターンがあり，30年，35年，40年ともに大きな変化はみられない。
- 2) 各市とも大阪市に強く牽引されている。
- 3) しかし大阪市への流出率は例外なく次第に減少しつつある。
- 4) 芦屋，西宮の両市は神戸市にも強く牽引されている。
- 5) 西宮，伊丹，宝塚，芦屋市においては神戸市への流出率が次第に増加している。
- 6) 6市1町内の流動パターンは尼崎が中心に成っている。
- 7) 伊丹を中心に川西と猪名川が結びつき，これが尼崎市に結びついている。
- 8) 宝塚市と芦屋市はそれぞれ西宮市と結びつき，西宮市が尼崎と結合している。
- 9) 大阪市への流出率が低下の傾向を示しつつあるのに反して，6市1町内の流動が高まりつつある(流入源参照)点からみて，6市1町の一体性，自立性は少しづつ高まりつつあるとみられる。

第9図

阪神間諸都市人口流動パターン (流出)

- 2.4%~1.0%
- 2.5%~4.90%
- 5.0%~9.9%
- 10.0%~49.9%
- 50.0%以上



第29表 I 流入源

(全流入人口に対する各地域流入人口の割合)

から	へ	年度	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町	計	神戸	その他の兵庫県下	大阪	その他の大阪府下	その他
尼崎市	から	1955年		24.8	12.0	2.3	2.5	1.1	0.1	42.8	16.2	2.5	24.6	10.5	3.4
		1960年		24.0	13.3	2.8	2.4	2.0	0.2	44.6	12.4	2.6	24.9	12.0	3.5
		1965年		24.5	15.7	3.5	2.1	2.9	0.1	48.8	12.6		19.6		19.0
西宮市	から	1955年	20.5		2.4	7.6	6.7	0.7	0	37.9	37.4	5.2	9.9	5.7	4.0
		1960年	19.3		3.0	8.7	6.7	0.9	0.05	38.7	26.9	4.5	14.5	11.3	4.1
		1965年	20.5		3.8	9.0	5.6	1.1	0.05	40.1	28.1		13.3		18.5
伊丹市	から	1955年	19.4	6.2		6.2	1.0	19.1	0.6	52.5	7.5	3.7	18.8	15.2	2.3
		1960年	18.4	7.3		8.6	0.7	21.9	1.2	58.2	7.1	4.7	13.0	15.4	1.6
		1965年	22.3	7.1		6.4	0.7	18.3	0.9	55.5	6.1		13.0		25.4
宝塚市	から	1955年	7.6	24.9	7.5		2.0	7.3	0.8	50.2	12.0	9.8	8.4	15.5	4.1
		1960年	6.3	23.8	5.2		1.8	9.6	0.9	47.7	11.8	11.3	8.2	17.3	3.6
		1965年	8.5	30.3	6.9		2.7	12.0	0.7	61.3	10.6		11.2		16.9
芦屋市	から	1955年	7.7	21.4	1.7	2.6		0	0	33.4	46.6	4.4	6.9	4.2	4.4
		1960年	11.2	22.5	2.5	2.9		0.4	0	39.4	40.5	3.9	6.8	5.6	3.7
		1965年	11.9	24.7	2.9	4.2		0.3	0.05	44.1	43.9		7.1		4.9
川西市	から	1955年	3.3	3.1	9.7	12.9	0		8.0	37.1	3.0	7.6	10.0	39.7	2.4
		1960年	3.8	3.3	10.0	11.7	0		9.3	38.1	2.1	7.2	4.5	44.6	4.3
		1965年	5.8	3.6	10.0	10.7	0.6		9.8	40.5	2.9		10.0		
猪名川町	から	1955年	0	0	0	34.4	0	0		34.4	0	37.5	0	0	28.1
		1960年	0	0	0	10.0	0	18.3		28.3	0	41.7	0	36.6	3.0
		1965年	2.8	1.1	5.6	10.6	0	55.9		76.8	2.2		6.1		14.9

40年は速報による。

(%)

第30表 I 流出先 阪神間6市1町の流動人口の流出先と流入出

(全流出人口に対する各地域流出人口の割合)

から	へ	年度	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町	計	神戸	その他の兵庫県下	大阪	その他の大阪府下	その他
尼崎市	から	1955年		7.4	2.3	0.4	0.4	0.1	0	10.6	8.6		74.0		5.1
		1960年		8.6	2.8	0.5	1.0	0.1	0	13.0	8.2		71.2		6.0
		1965年		9.4	3.5	0.8	1.2	0.2	0	14.0	8.5		64.3		10.1
西宮市	から	1955年	16.4		0.8	1.5	1.1	0.1	0	20.6	17.9		56.7		3.7
		1960年	15.7		1.1	1.8	2.0	0.1	0	20.6	17.8		55.4		4.3
		1965年	14.1		1.1	2.6	2.3	0.1	0	20.8	18.6		52.2		6.5
伊丹市	から	1955年	29.6	4.0		1.7	0.3	1.1	—	37.9	6.5		48.5		6.6
		1960年	32.0	4.9		1.4	0.8	1.0	—	40.1	7.0		44.8		6.8
		1965年	30.1	5.6		2.0	0.9	0.9	0	39.5	8.3		39.8		10.1
宝塚市	から	1955年	6.5	13.4	3.5		0.6	1.4	0.1	24.2	9.2		55.0		9.1
		1960年	6.9	15.0	4.6		0.9	1.2	0	28.7	9.7		49.9		9.4
		1965年	6.9	13.7	3.3		1.4	1.1	0.1	26.5	10.7		47.4		12.3
芦屋市	から	1955年	5.0	8.9	0.4	0.4		0	—	13.3	28.8		51.0		3.4
		1960年	5.7	11.1	0.4	0.5		0	0	17.8	30.1		46.8		3.2
		1965年	5.3	10.8	0.5	1.0		0.1	0	17.7	31.5		43.1		4.7

から	へ	尼崎市	西宮市	伊丹市	宝塚市	芦屋市	川西市	猪名川町	計	神戸	その他 兵庫 県下	大阪	その他 大阪 府下	その他
川西市	1955年	4.8	2.9	16.0	2.6	0.1		0.1	25.1	2.5		47.9		21.9
	1960年	7.0	2.3	18.2	4.2	0.2		0	31.8	2.2		42.3		22.9
	1965年	7.9	2.3	12.9	4.8	0.1		0.5	28.4	2.0		40.5		27.6
猪名川町	1955年	3.6	1.3	4.3	6.0	—	26.5		39.6	3.0		19.9		33.8
	1960年	8.1	1.5	14.2	5.2	0.2	19.8		49.9	1.4		21.4		27.4
	1965年	4.7	1.7	10.3	4.7	0.4	20.9		42.7	0.3		15.4		40.3

備考：神戸市以外の兵庫県下と大阪市以外の大阪府下は，その他にふくまれている。40年は速報による。（％）

〔6〕人口移動（転出・転入）

人口の自然増加とともに都市の人口構造に影響を与える要因は社会増加すなわち「転入」と「転出」の量である。人口動態の項で見て来た通り，都市の人口増加に占める社会増加の割合は次第に低下し，逆に自然増加の割合が増加して来た。6市1町においても芦屋市をはじめとして多くの市が社会増よりも自然増の方が上まわっている。しかし宝塚市や川西市にみられるように，社会増加は依然として都市の人口増加の重要な意義をになっている。次に社会増すなわち転出入の動向をみてみよう。

まず各市の移動性指数 $\frac{\text{転入} + \text{転出}}{\text{総人口}} \times 100$ を計算すると

- 1) 芦屋がずばぬけて高く，伊丹，川西，宝塚がこれについて高い。
- 2) 芦屋市はのび率も高い。
- 3) 各市ともここ2～3年の間のびなやみと成

第31表 6市1町の移動性（昭和30年～昭和43年）

市	年度	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年
尼崎市		16.4	16.6	19.8	—	19.4	20.0
西宮市		18.8	20.1	21.7	23.6	21.2	22.1
芦屋市		—	24.7	25.7	26.5	28.3	30.9
伊丹市		—	18.2	23.4	22.9	24.1	23.5
宝塚市		16.5	18.2	24.1	23.4	23.5	23.2
川西市		22.4	22.6	22.9	21.5	23.9	23.7
猪名川町		5.9	5.8	4.3	7.7	7.5	7.7

第32表

市	転入・転出 年度	転入源					転出先				
		6市 1町内	兵庫県 大阪府	近畿，中 国，四国	九州	東京圏	6市 1町内	兵庫県 大阪府	近畿，中 国，四国	九州	東京圏
尼崎市	昭和30年	12.3	42.8	22.4	11.6	3.2	16.1	47.4	15.5	7.7	5.1
	昭和35年	9.6	36.9	23.0	20.6	3.6	15.3	45.7	11.1	4.9	5.2
	昭和40年	—	—	17.9	14.5	4.6	19.4	43.7	14.3	8.5	6.8
	昭和41年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	昭和42年	13.7	45.1	17.6	13.3	5.2	18.0	47.1	16.3	7.5	6.8
	昭和43年	12.8	43.8	15.9	14.3	5.4	18.2	46.1	13.7	7.6	7.4
西宮市	昭和30年	—	—	18.7	5.6	6.7	—	—	13.9	4.5	11.5
	昭和35年	—	—	18.1	9.8	9.6	—	—	10.9	3.4	12.8
	昭和40年	—	—	16.8	7.8	10.2	20.3	40.6	13.4	4.8	12.9
	昭和41年	15.2	42.7	14.2	6.9	11.2	18.1	49.6	11.7	3.9	12.3
	昭和42年	15.9	41.7	15.0	7.5	11.5	19.5	42.1	13.1	4.6	13.2

市	転入 転出 年度	転入源					転出先				
		6市 1町内	兵庫県 大阪府	近畿, 中 国, 四国	九 州	東京圏	6市 1町内	兵庫県 大阪府	近畿, 中 国, 四国	九 州	東京圏
西宮市	昭和43年	15.8	40.6	18.3	7.9	11.5	20.0	41.1	19.1	4.4	13.3
芦屋市	昭和30年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	昭和35年	—	—	13.9	5.4	9.8	26.1	39.0	9.3	3.6	14.6
	昭和40年	—	—	11.6	6.1	13.0	24.9	23.6	10.2	3.6	14.1
	昭和41年	13.9	40.7	12.8	5.7	11.4	22.2	40.4	11.0	3.4	13.5
	昭和42年	15.1	43.4	13.1	6.5	11.1	18.0	41.1	12.2	2.9	14.0
	昭和43年	15.7	42.5	12.9	5.8	12.0	19.8	34.5	11.1	2.8	12.4
伊丹市	昭和30年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	昭和35年	20.3	33.0	20.1	13.3	4.5	24.9	41.8	15.1	3.4	8.4
	昭和40年	24.8	33.7	18.6	11.6	4.9	24.6	35.4	15.9	7.1	7.6
	昭和41年	27.9	34.7	18.6	7.3	5.9	26.6	35.7	16.1	7.0	8.7
	昭和42年	25.2	33.0	20.1	10.3	5.6	29.3	36.1	15.1	6.8	7.9
	昭和43年	26.1	33.3	18.6	10.6	5.6	26.0	36.1	17.1	6.7	8.7
宝塚市	昭和30年	22.1	46.9	14.8	4.3	6.3	23.3	46.3	12.3	2.5	10.8
	昭和35年	20.7	50.1	11.1	5.9	5.7	19.2	53.9	7.4	3.0	9.8
	昭和40年	23.3	50.8	9.2	4.5	5.7	20.9	46.2	10.5	3.8	10.9
	昭和41年	27.7	45.8	10.6	6.9	6.9	21.1	42.6	12.6	3.7	11.7
	昭和42年	28.6	38.3	11.0	7.2	7.7	23.6	40.1	12.5	4.5	12.7
	昭和43年	29.7	40.1	10.4	5.6	8.3	21.8	41.2	12.4	4.4	12.4
川西市	昭和30年	17.6	43.4	21.1	9.4	2.8	22.5	55.9	6.5	1.8	3.9
	昭和35年	17.6	43.3	21.1	9.4	2.8	22.0	55.0	6.3	1.8	3.8
	昭和40年	19.5	53.6	11.5	5.2	2.7	18.6	52.6	9.7	3.3	4.6
	昭和41年	—	—	12.2	5.7	3.1	18.8	59.5	11.2	3.0	5.2
	昭和42年	23.0	50.9	10.5	5.2	3.5	19.6	54.1	10.5	4.2	4.8
	昭和43年	23.6	54.1	10.1	5.5	3.2	21.2	52.7	11.3	4.4	5.3
猪名川町	昭和30年	30.0	51.8	10.3	1.5	3.7	28.2	41.9	2.0	0	1.0
	昭和35年	25.5	58.8	4.5	2.8	4.4	37.8	55.1	3.1	0	3.1
	昭和40年	36.1	26.0	3.6	1.8	0.9	40.2	39.3	4.0	0	8.0
	昭和41年	34.5	50.2	7.9	1.8	0	28.3	57.9	6.2	2.2	1.9
	昭和42年	17.1	54.5	9.4	4.8	1.3	34.3	41.7	11.1	0	0.6
	昭和43年	20.1	51.7	4.6	3.9	0.4	33.9	47.4	7.3	2.2	1.3

って来た。

4) 猪名川は移動性が低い。
次に5つの地域別にわけて転出入の動向をしら

べてみよう。

まず「6市1町」についてみると
6市1町からの転出入が多いのは伊丹・宝塚・川

西・猪名川などである。芦屋から六市一町への転出も多かったが最近減少しつつある。

次に大阪・神戸両市を含む「大阪府・兵庫県」についてみると、転出入が多いのは川西市、猪名川町である。

「近畿・中国・四国」の場合、転入については尼崎、川西市の場合、30年、35年までは多かったが最近減少した。伊丹市が転出入とも比較的多い

「九州」は転出入とも尼崎・伊丹市が多い。

「東京」は転出入とも西宮市と芦屋市に多く、宝塚市の場合には、転出のみが多く成っている。

次に「6市1町内部の移動」についてみると、全体的にみていくらか増加の傾向にある。ただし芦屋市から6市1町への転出は減少気味である。

「転入源」についてみると、

「尼崎」へは西宮、伊丹からの転入が圧倒的に多い。

「西宮」へは尼崎からの転入が多い。

「芦屋」へは西宮から転入が多い。

「伊丹」へは尼崎、西宮からの転入が多い。

「宝塚」へは西宮、尼崎から多い。

「川西」へは尼崎、伊丹から多い。

「猪名川」へは川西から多い。

「転出先」については、

「尼崎」からの転出が多いのは西宮、伊丹である

「西宮」からの転出は尼崎、宝塚が多い。

「芦屋」からは西宮が多く、尼崎がこれについている。

「伊丹」からは尼崎が多く、ついで西宮、川西となっている。

「宝塚」からは西宮、尼崎へ転出が多い。

「川西」からは伊丹、尼崎、宝塚へ多い。

「猪名川」からは川西、宝塚、尼崎へ多い。

以上人口移動（転出入）について検討してきたが、一部データが欠けていること及び一部不正確な点があるのでためあまり断定的なことはいえないが、全体的にみて次の点を指摘出来よう。

1) 昭和30年から昭和43年の13年間についてみると、大きな変化はみられず、全体的には予想外に安定したパターンを示している。

2) 人口移動の法則にしたがって、一方的な流れではなく、かなりの量の反対流がみられる。

3) 6市1町内の移動のパターンは6市1町内の日常的な流動パターンによく類似している。

要 約

以上広域都市の人口動態について分析をすすめて来たが最後にこれを要約してみよう。

1) 阪神間は阪神都市圏のなかでも最も早く、昭和のはじめから郊外化のすすんだ地域であるが戦後は、北大阪や東大阪の都市化に比較すると都市化のスピードにはぶっている。しかし開発技術の発展によって丘陵や山麓の宅地化がすすんでいる。ことに伊丹・川西・宝塚・猪名川などの内陸部では大規模な開発がすすんでいる。

2) 6市1町の人口構造の第1の特徴は、6市1町のなかで大きな違いがみられる。ことに芦屋市と猪名川町は、それぞれ違った意味で他の市とは性格を異にしている。

3) 年令構成からみると

①年少人口指数が最も大きいのは猪名川町で最も少ないのは芦屋市である。

②老年人口指数は猪名川がずばぬけて多く、尼崎と伊丹がきわめて少ない。

③従属負担係数でみると猪名川だけが負担係数が非常に高く成っている。これらを総合すると猪名川町は、過疎地帯の様相を示しており経済的に不利な条件を示している

④老化指数でみると猪名川が最も老化しつぎに芦屋が老化している。

⑤年令構成からみて尼崎市と伊丹市はきわめて類似した様相を示している。

4) 人口動態についてみると、

①出生率は猪名川町が非常に低い。また芦屋市が全国平均よりやや低い、他の市では全国平均より相当に高い。

②死亡率についてみると、猪名川町が全国平均より少し高いが、他はいずれも低い。

③自然増は猪名川町が異常に低く、芦屋市が全国平均の水準であるが、他は非常に高い。ここでも猪名川町と芦屋市は他市と異った性格を示している。

- 5) 自然増と社会増の関係をみると、きわめて顕著な現象がみられる。本来都市は自然増が少なく社会増によって増大して来た。6市1町の場合にも昭和38年以前は社会増が自然増を大きく上まわっていたが、38年から40年に社会増が大幅に減少し、逆に自然増が増大したため両者の量はいちぢるしく接近したが、41年には両者が逆転し42年、43年には自然が社会増を大きく上回り、その差は増大する傾向にある。
- 6) 出生力については、
- ①女子(20~44才)1,000人当り子供数(5才以下)をとってみると、伊丹、川西が多く、芦屋市が少ない。
- ②年令別特殊出生率でみると、芦屋市は24才以下で少なく、猪名川町は30才以上で少ない。
- 7) 都市の産業機能によると
- ①尼崎と伊丹は高度に特化した工業都市であり、宝塚市はサービス都市であるが、西宮、芦屋、川西市は標準都市である。
- ②産業機能図を昼間人口と夜間人口の双方で比較すると、芦屋市の場合には夜間人口では標準都市であるが、昼間人口では高度に特化したサービス都市である。宝塚市の場合にはサービス業への集中が夜間人口よりも昼間人口の方が高い。
- 8) ①人口の流動性は各市とも次第に高まりつつある。
- ②大阪市への流出量は各市とも大きい、流出率は各市とも減少しつつある。
- ③芦屋と西宮市は神戸市へ吸引されている
- 9) 流動のパターンは尼崎市を中心に伊丹・川西・猪名川が結合するブロックと、西宮に宝塚と芦屋が結びつき、西宮が尼崎に結びついている。
- 6市1町内の流動性が次第に高まりつつある。
- 10) 人口移動のパターンはかなり安定しており6市1町内の流動のパターンに類似している。

付記 本稿の資料を集めるにあたっては阪神広域行政都市協議会の山内事務局長および事務局の皆様にご助けていただいた。また数字の整理計算にあたっては関学社会部四年度生(昭和44年3月卒業)の小林典子さんに大変お世話になった。記して皆様に感謝の意を表明したい。